

バストス週報

第三百六十八号
昭和卅二年
四月三十日
発行

DIRETOR
KOITI MORI
REDATOR
SHION ODA

REDACÃO
RUA PRES.
VARGAS 188
C. P. 112
BASTOS
C. P.
ANUAL
100\$-

公認日本語学校

ドーナルハルエ マツモトが日本語教師の
 検定をパスしたのは、多分六年前のこと
 だが、当人はクルホエスコラールの
 先生で且つ任地がバストス以外の町村で
 あったため、日本語学校開設のことを考
 える余地もなかったようである。

ところが今年の新学期から、その出身
 地たるバストスのクルホエ校を教鞭をとる
 こととなり、はじめは日本語教師の免状
 が役に立ち、日の目を見ることになった
 。二三先輩のすすめで日本語教授認可手
 続をしたら、去る四月四日州官報三五六
 六号で許可になったことが発表された。
 マンモト先生の抱負によること、ジナジ
 オ・サンジヨセ内につける一外国語として日
 本語を、英、法、ポラン、ス語同様、正課とし
 て扱って貰いたい、一つは日系学生が多
 いので他の外国語ほど骨は折れないうし、
 又学校側の立場からいって、日本語も
 教科課程にあることは学校のフロパカン
 タとして大いに役立つ、ということであ
 り、したが、中学校の方都合で直ちに実現
 できず、松本女史が自力で、中学校内の
 一室で日本語科を設けることとなったも
 ようである。

中学校内で正課として取扱ったことは
 教員前一度近沢氏によつて試みられたこ
 とはあったが半歳を出でずして中絶しま
 った。バストスに於ては公認教師として
 日本語科開設を公認されたことは今回の
 松本女史を以て始めとする。

同女史の希望ではバストス中の子弟が
 日本語を法に従って少しでも多く勉強し
 て、偉大な母國の感化を日本語を通じて
 受けることは、やがてブラジルの文化興
 隆に寄与する、よすがとなる点にある。
 優秀な民族國民は必ず自國語の外に三
 つ四つと外国語を話すことが出来、國際
 人と一々すくられた生活を営んでいく。
 日本人を両親にもち作りその母國語を
 知らないで教養ある日系と云い得るであ
 るか、ハルエ女史は虹のような気焔
 をあふるのである。

戦前よりの急激なナチズム的風潮
 によつて外国語ことに日本語は異端視さ
 れ、ハワガイに近い運命にいかめしうられ、
 日本語教授にあこがれをもち作り

ALFAIATARIA IMPERIAL



丸山洋服店
声もい、フクもい、あれは丸山製さ、

日本のわかせせき

常用いたしますと
 胃腸のけたりさが活潑となり
 しんのお肌か
 輝くはかり美しく
 なります

健康美といひので
ございませう



わかもと製薬
 東京わかもと製薬
 株式会社
 輸入元 伯國總代理店
 パウリスラ製薬会社
 C.P. 聖市三五六

なり行きに委せたことは、みとりバストス
 居住者のみではなかつたが、戦後日伯関
 係も元通りとなり、日本語を日系が学ん
 だ、使ったと、何らさしつかえのないの
 だが、中には保守的な考えをもつ一部伯人
 教師の中には今でも日系の日本語勉強を
 好まない人がある。吾々日本人は世界一と
 情の問題である。吾々日本人は世界一と
 うぬぼれてはならぬが、相当すべからぬ
 族である。たとえ一度は敗れたこと、あ
 った、必ず将来武力以外の道で覇を唱う
 る民族である。吾々の精神的遺産をなくす
 るについで、吾々の精神的遺産をなくす
 文化と、吾々の精神を日本語と通じて、吾々の
 子弟に伝えない、日系人はその伯語の力

仕未で全くお気の毒でなりませぬ。即ち
 動脈硬化による高血圧は老人病で、氏の
 場合小脳附近の血管が破裂したのが、年当
 の範しよるもなかつた様です。然し平素
 から自重し自分の血圧をコントロールし
 て居られたならば末長く長生きされた
 と思ひます。

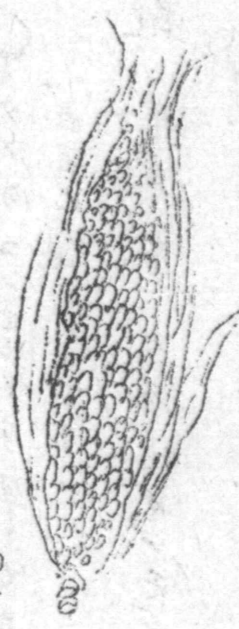
普通自分の年齢に九十を加えた数字が
 その人の平均血圧でありますから、氏の場合
 六十に九十を加えたと百五十四前後
 後であられた当分の血圧は驚く勿れ
 二百八十もあつた話とさきましました。又当
 日ゴルフが好調であつたため過労に過
 夫のモーニングも知れませんが兎に角二
 百と云えぬ場合は、いづれにせよたおれるか
 も知れない非常な或区域にある事を自覚
 して、医者の注意にしたり、必要がありま
 す。薬品療法は勿論必要でありませぬが、
 この他に最も大切な事は食事療法で、絶対
 に塩分をさけるか殆どない程減少するこ
 と、特に味噌汁が悪い。水分を少くする
 こと、豚肉の様なペザードのものはさけ
 ること、等でありませぬ。これと同様に
 酒ビールウイスキータバコ等は、大害あつ
 て一利なきものでお来るだけ減少する様
 には、又熱い風呂に夕食後は入ることは禁
 物で、よく風呂場でおかれるのもこの為
 です。安眠さばかり、支障小人の様な
 興奮とさけること、又暑いゴに熱中する
 こと、極めよくありませぬ。
 我々友人であつたフヲ拓才久保支院
 人は、午前中はゴルフで過ごし、中食後マ
 ージャンを友人連と嬉しむ笑談、たおれ
 たのもそのよい例でありませぬ。行年は四
 十九才でした。
 死は天命とあきらめるより他に方法は
 ありません。各自自重するおしなやかに
 よって寿命をのびし得ることを書いた次
 第であります。

代議員 便り

四月十七日 区長さんへの集り
 池田別館で開催された事

- 1 承認を得て居なかつた理事のメンバ
 1に改めて代議員会で承認を得る
- 2 学校に関する事、セツソンの学校
 当事者が学校当局と交渉をする件が起
 った場合は、連日理事会の学務理事を
 煩わすことをおぼすすめする。
- 3 奨学金(寄附金)案の研究
- 4 入植祭を本年七月十三日及十四日と
 実施する案を決定
 かくし芸大会を催すにつき参加希望者
 は一日七早、西川理事迄申込むこと
 以下下段へ

デブリアアデ
 ミーリヨ



マキナは目下評判のペンニア
 機を使用し

日照・祭日・夜間も出張します
 なおお客様への便宜を計り

サツゴバジウ

沢山用意いたしました故御利用下さい
 申込所 バストス産業組合

共賞
 竹内義輝
 ネルソン内馬場

リニア賣出し開始
 在任者各位の御協力御買上げを願う
 特別会計決定迄
 山本一男 植木西二の二会計理事
 之を取扱

5 病院会計は本年四月以降太郎田衛氏担
 当す。但し四月以前の未処理に對して
 は連日会にて処理すること
 6 ドトールの住先は連日会にて建築し、日
 会の不動産とするが、医療部が完成健
 全な運行を示すようになつてからの移管
 すること

7 コロニア五十車祭に協力すること
 但し寄附行為は入植祭後にすること
 同日同所で協議された病院
 関係事項についておしりせ

病院事項担当理事は任期を二月とし
 第一期理事を
 太郎田 衛、重道 永栄、ニ氏とす
 病院の諸事項について相談、申入れ等
 すべて前記二氏になされ度し

爾今連日会理事会を病院経営の諮問
 委員会として認めること、以上決議決定
 同日同所で谷口市議より左の如き
 重要特別動議が提案されました

夜なべ

評者イトネ

夫夜なべやとさきことばかりでも見 稲花
 毎夜の事乍ら夫は夜なべに打ち込んで切っている
 とさおりは、いたわりの言葉、妻を妻がかけ
 るというのであろうか
 此の叙述から言うと妻の座から夫の立
 場をねがう場面がはつきり出てくるた
 め、作者が女でないこと、さかぬない様に思
 われる。夫を妻とあきかえれば、よいような
 る。各観描寫として、さきさき言葉「利がななく
 近作として互選の際高点をとった句だが、

おしらせ

今回 ミーリヨ脱粒業者間で
 料金 壹俵にツネ
 金貳拾クルセーロ

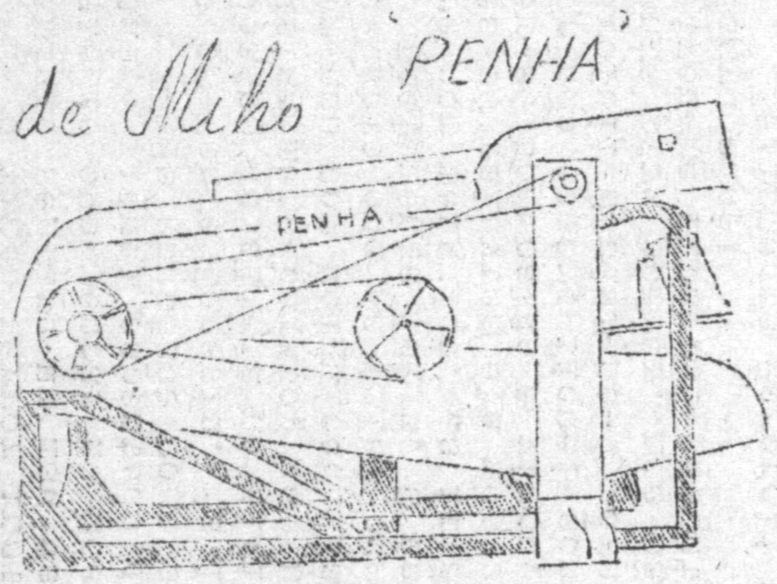
いたたく事に協定いたしました
 御承知下さい

竹内 義輝
 野沢 一衛

新型 **デブリアドール** PENHA

ミーリヨ脱粒の御用命は
 長年の経験ある弊店、

御用命下さい



本機を以て作業いたしますと
 パーリヤとミーリヨを完全にセパ
 致しますので、ミーリの損失は絶無で
 ます。上りは実にきれいです
 ○ 日曜・祭日・夜間も出張いたします
 ○ バストス外でも出張いたします

カンポス・サーレス街 (カティヤ前)

申込所

野沢 一衛

アテマルネ バロス街 角 鶏組組合

阿部 新藏

バストス哥会

四月十四日山本居に於ける哥筵

当日席題 菊 趣味

高点順

菊作の趣味は父より受けしもの
 娘は吾れに似て、スリアを作る 一男
 趣味と云へど目標遠き斯道
 こと想ひのつ花を流けゆく 千代子
 よき趣味と云はれて、或時腹立ち
 かく苦しみて歌詠むものを 扶美
 追々と趣味の語にうづり来て
 甚し酒席に酔はれて賑ふ 千工
 難解な「サンデーフェイス」に執りつ
 一日昏れたり趣味と云はむか 菊子
 趣味多くありと思へど皆成し
 この現実の吾が成はすかいつ 羊鈴
 一輪の菊沾け終えて清らかに
 其の日の幸を求めるとく 忠雄
 千代子 羊鈴 以下見

- "ão me compreende, disse ele com um sorriso, porém é bem simples quando uma pessoa está muito doente, ou tratam-na ou deixam-na morrer. Se me deixarem morrer, acabar-se-á tudo; não terei mais fome, nem mais pancadas; e depois, dizem que os que morrem, vivem no céu; então lá do céu poderei ver a mãe cá em baixo na aldeia, e falando com Fosso Senhor poderei talvez impedir minha irmã Cristina de ser infeliz, pedindo-lhe muito. Se pelo contrario me tratarem, mandar-me-ão para o hospital e terei eu ir para lá.

Tu tinha terror instintivo do hospital e muitas vezes, quando no caminho sentira um mau estar causado pela fadiga não me fora preciso mais do que pensar no hospital para me sentir imediatamente disposto a andar; fiquei espantado de ouvir Mattia falar deste modo:

- Se soubesse como se está bem no hospital, continuou ele; já estive em Santa Eugenia. Lá lá um medico, um louro alto, que traz sempre rebuçados de alveia na algibeira; são dos quebrados porque os quebrados custam mais barato, mas não são peores por isso; e depois as irmãs fallam-nos com meiguice: "Faze isto, meu menino; mostra a lingua filhinho" Eu gosto que me falem com meiguice, dá-me vontade de chorar, sinto-me completamente feliz. É estúpido, pois não é? Mas a mãe fallava-me sempre com meiguice. As irmãs fallam como fallava a mãe, e se não são as mesmas palavras é a mesma musica. E depois quando se começa a melhorar tem-se bom caldo e vinho. Quando comecei aqui a sentir-me sem forças por não comer, fiquei contente; disse cá para mim: "Vou estar doente a Garofoli mandar-me-á para o hospital". Ah! pois sim, doente; doente bastante para sofrer, mas não o suficiente para incomodar Garofoli; ele deixou-me ficar. É espantoso como a vida é difficil de suportar para os desgraçados!

Felizmente Garofoli não perdeu o costume de me administrar castigo a mim como aos outros, deve-se dizer, tanto que ha oito dias deu-me uma boa paulada na cabeça. Desta vez, espejo que o negocio esteja em bons termos; tenho a cabeça inchada; olhe, vê, aqui esta grande altura branca? ele dizia ontem que talvez fosse um tumor; não sei o que é um tumor mas, pelo menos parece-me que é coisa grave; o caso é que soffro muito; tenho picadas por baixo do cabelo mais dolorosas que as das dôres de dentes; a cabeça parece que me pesa arrobas; tenho turbações, vertigens e de noite enquanto durmo, não posso deixar de tremer e de gritar. Por isso creio que daqui a dois ou tres dias isso vai decidi-lo a mandar-me para o hospital; porque, bem vê, um pequeno que chora de noite incomoda os mais e Garofoli não gosta que o incomodem. Que felicidade eis ter-me dado esta paulada! Vamos lá com franqueza, estou muito pálido?

Dizendo isto, veio collocar-se na minha frente e olhou para mim com os olhos fixos nos meus.

Já não tinha as mesmas razões para me calar, não me atrevia porém a responder-lhe sinceramente, a dizer-lhe que impressão horrivel me faziam os seus grandes olhos luminosos, as suas faces cavadas e os seus lábios descordados.

- Parece-me que está doente bastante para entrar para o hospital.

- Até que enfim!

Tentou fazer uma mesura com sua perna arrastada. Mas logo em seguida, dirigindo-se para a mesa, começou a limpá-la.

- Temos conversado, disse ále, Garofoli está aqui esta a chegar, e se continuassemos não estaria nada pronto; ora visto achar que eu já levei as pancadas necessarias para ir para o hospital, não vale a pena apanhar mais; essas seriam perdiads; e agora, as que me dão parece que me fazem doer mais as que me davam ha meses. São bons, não são, os que dizem que a gente a tudo se habitua?

Enquanto fallava, andava coxeando á roda da mesa, pondo os pratos e os talheres no seu lugar. Contei vinte pratos; eram pois vinte crianças que Garofoli tinha sob a sua direcção; como não via senão doze camas e que dormiam aos dois e dois. Que camas! não tinham lençois, tinham umas cobertas vermelhas, que deviam ter sido compradas nalguma cavalariça, quando já não fossem bastante quentes para os cavalos.

- Em toda a parte é como aqui? disse eu assustado.

- Em toda a parte, onde?

- Em toda a parte que tem assim crianças.

- Não sei, nunca fui a mais parte nenhuma; agora, o menino, veja se vai para outra parte.

- Não sei; seja onde for, estará melhor do que aqui. Seja onde for era vago; e em todo o caso, que melos empregar para mudar a decisão de Vitalis?

近東 Oriente Proximo

の動き

宮尾 進

去年のズエズをめぐる事件が展をひいて、近東の様子は今もなお、へたをすねばいつまた戦争になるかも知れない。あふない状態が続いている。そこで今月はあるズエズ事件後の近東の動きを書いて見よう。

今一番問題になっているのは何かといふと去年のズエズの事件の時、国境を越えてエジプト領土へ攻めこんだイスラエル軍をめぐってである。イスラエル軍はあの事件以来今日までエジプト領でイスラエルとエジプトの間にアカバ湾といふところから引きあげないで居る。イスラエルは、ここを引上げるとエジプトの海軍にイスラエルがあふない目にあうから引上げろわけにはいかないのだとかんがへていた。がどうやら国連(ONU)が中に入って、とにかくイスラエルはエジプトの領土から引きあげろとすすめられたのでしよう。が、先日の二つの場所から引上げることになった。だが、これだけ問題がめでたく片がついて平和になったわけではない。まだ、これからの様子では、又いつ火を付く戦が始まるかわからない。あふない状態にある。

ではなぜイスラエルとエジプトは、こんなにも仲がわるいのだらうか。それを知る前に先づこの辺りの歴史を知らなければならぬ。くわしい事は別として、かんたんにいうと、イスラエルは第二次世界大戦のあと一九四八年に新しく生れたユダヤ人(ジユダヤ)の国である。ユダヤ人といふのは、ピリア(聖書)でもよく知られているように、クリストの生れる前に、もう自分の戦国を失い、それからずっと今迄世界中にちらばって着いた民族である。だが世界のどこでもさうわれるユダヤ人は自分たちの故郷であるパレスチナへ帰って自分の国を作つて、そこを暮らしたいと考へて、いよいよ新しく考へたユダヤ人が、イスラエルなのである。ところがこのユダヤ人の国のできるのを非常にきらつて、イスラエルがある。それはイスラエルをとりまくヨルダン、サウジアラビア、エジプト、シリア、レバノン、イラン、というアラビア人のつくつた国々である。これらの国々は、国々をこまごまがうが同じアラビア人、

△このころ作つて、いる国であり、宗教も殆んど皆、回教を信じて、かたく結びつて、(アラブ連盟)といふものを作つて、いる。それが一しよになつて、ちがつた民族で、ユダヤ教をかたく信ずるユダヤ人の国に、反対して、いるのだ。なにか、ユダヤ人が、独立して、かうも、すつと、その、独立を認めようとした。いアラビアの国々との間には、い、つ、も、国境をめぐつて、ゴタゴタ、が、続いて、来た。それが、爆発したのが、今度のズエズ事件だ。は、じ、まり、なつたわけだが、ズエズ事件は、ひとま、お、大、きな、戦争、になら、ず、お、さ、ま、つ、た、と、はい、え、イスラエルとアラビアの国々との、関、係、は、ま、す、く、わ、ろ、く、な、つ、て、来、て、い、る、今、は、国連の軍隊として、フランスをはじめ、十、ヶ、国、の、軍、隊、が、イスラエルのエジプトの領、地、か、ら、引、き、上、げ、ろ、の、見、は、り、し、て、い、る、の、だ、が、国連の軍隊が引き上げたり、又、戦、争、に、な、る、の、は、な、い、か、と、あ、や、ぶ、ま、れ、て、い、る。イスラエルとアラブだけの争いなら、大したことは、な、ら、な、い、か、も、し、れ、な、い、し、か、し、その、裏、には、アメリカとソビエトが、ひ、か、え、て、い、る。植民地の状態から、完全、に、独立を、か、ち、と、ろ、う、と、す、る、アラブの、国、々、の、民族主義運動を、助、け、よう、と、し、て、い、る、ロ、シ、ア、と、この、ロ、シ、ア、の、動、き、に、対、し、も、し、ロ、シ、ア、が、この、近、東、方、面、に、出、て、来、たら、戦争、を、し、て、こ、も、や、つ、つ、け、よう、と、待、ち、か、ま、え、て、い、る、アメリカとの、に、ら、み、あ、い、が、あ、る、り、で、

御 礼

- 金一封 太郎 田 衛 様
金一封 坂本 真 吾 様
金一封 信 太 兵 治 様

右 本会 の 基 本 金 へ 御 寄 贈 下 さ い ま し た。あ り が た く 御 礼 申 し 上 げ ま す。

柳 浦 龍 太 郎 様 に 御 礼

貴 下 は 本 会 の 為 に 数 々 の 御 盡 力 を し て 下 さ い た。上、大 会 後 は 特 別 の 御 供 餐 を 催 し て 下 さ い ま し た。団 員 一 同 深 く 感 謝 い た し ま す。

御 礼

去 る 四 月 十 六 日 夜 シ ネ マ 興 行 の 際 は 満 場 立 錫 の 余 地 な く 御 来 場 下 さ れ 御 蔭 を 以 て 平 期 以 上 の 成 績 を あ り 申 す 事 が だ せ ま し た。あ り が た う ご ざ い ま し た。

野 球 愛 好 者 各 位 並 に 皆 々 様

ツルマ フラ ー ボ

イヌラエルとアラビヤの小さな争いも、いつ又大きな世界戦争にまでひろがるかわからない。

こうしたユマヤとアラビヤの民族あり、植民地に対する民族主義のたがいの、アメリカとロシアのにらみ合い、といういくつもの問題がかうまっただけであらうい動きをして、近東の様子に今世界中の目はむけられてゐる。

(エスペランサ誌 第十四号 (四月)より)

エスペランサ誌 誌は二世紀系の日本語をいかにして、たやすく、きょうみ深く、おぼえさせるかという目標のために編輯されてゐる月刊誌です。

日系二世たちに、日本語を学ばせませう、ひらがなを用いて、ことばをおぼえさせる運動へ参考加下さい。

エスペランサ誌は、一ヶ年百針です。ごきの方には見本をこし上げます。

週報社

いよ／＼近づいて参りました
五月七日より十七日迄
十日間

磯谷鍼灸本院より
バストスへ出張します

場所 榎 旅館

本鍼灸の特長
無痛 無痕 奏効五倍以上
旧来の鍼灸を一新せる
現代最新 最高の 鍼灸医術

療 法 科 目 (特研療六種見)

- 一 病源診察電気治療
- 二 灸頭鍼瘻血吸圧療
高血圧を始め深部病源を掃滅する
ゆる難病を根治す
- 三 皮内鍼モツキス灸 挫刺鍼
特に神聖痛、リウマチスに神効を奏す
- 四 ラジオン での鍼灸
いかなる慢性頑痼症もラスク全快す
- 五 神効古典医術百鍼法
- 六 万病根治家伝秘法名灸

羽瀨商會

羽瀨記代夫人に感謝

羽瀨商會の羽瀨記代夫人といえは、閑秀俳人として全伯に聞えた方であるが、先年星野立子先生を案内して各地旅行の節、当バストスへも立寄られ、仙人掌社の遠中と俳句交歓された事があり、その行脚記念に同社製造の立派な「鳩時計」一個を寄贈された。仙人掌社では規定を設け、毎月俳句成績により最高点を連続四回獲得した者に特賞として授与することになつたので、依然大張切名句続出して、覇を争つて居る。

記代夫人の御厚意に俳人一同大いに感激してゐる。

Nossa Relojaria

AV. TAMOIOS 785 TUPÃ



時計 貴金属一切
めがね 指輪
最良信用ある
当店で！
ツツパン市
アベニータ マモヨ 七ハ五
ツツサ 時計店
絶大の信用！

はなれ馬は誰のですか
四月廿六日濃茶色のエクス仔連馬が
私方へ来ました
つないでありますか、とりて来て下さい
ウニオン / 区 谷 中

羽瀨記代さんの近作

土くれをくさす 鋏先蜘蛛走る
火桶樹や園の鳩帰を迷れ来し
同かぬ気の肩宇に額汗拭かず
跡ととむ音楽堂や木下 園